昭和44年2月24日 国鉄東局特別扱承認新聞紙第490号
昭和40年5月8日第三種郵便物認可（毎週一回金曜日発行）

☆反帝闘争を
プロレタリア日本革命へ！
☆プロレタリア世界革命の旗の下
共産主義者同盟に結集せよ！
共産主義者同盟

8月1日
週刊
第188号
編集発行人 佐々木和雄
一部 20円
購読料 20回500円（〒共）

戦旗

戦旗社
東京都千代田区三崎町2―7―6滝沢ビル内電話代表03（261）2961振替（東京）26110
大阪支局大阪市福島区鷺洲本通り1―16 北村ビル 電話06（458）6597
京都支局京都市左京区下鴨宮崎町128―29（075）（701）0025
名古屋支局052（732）3553

1969年8月1日 第188号

8月4日／大学立法粉砕緊急行動
（全都全共闘・日比谷野音午後3時）

第2回国際反帝会議をかちとり、安保決戦へ

過渡期国際階級闘争を世界プロレタリア独裁、世界共産主義の勝利へ！

第二回国際反帝会議（九月五日～十日）へのアピール

帝国主義の侵略、抑圧、反革命と対決し、自国帝国主義打倒にむけて、日夜、闘いを組織している同志諸君。

民族解放・プロレタリア独裁をめざし、反帝武装闘争の先頭に立っている同志諸君。

スターリン主義官僚と敵対し、プロレタリア独裁の復活と国際反帝闘争の根拠地たらんと闘いぬく「労働者国家」の同志諸君。

公認共産主義指導部から自己を訣別させ、世界階級闘争において新らしい闘争を作り出してきた我々の闘いは、今、飛躍の時を迎えた。それは、闘争における暗黙の連帯から、即ち、革命的諸党派の鉄の国際連帯の確立とその下での階級闘争の国際的結合――今や、このことが、火急の課題になりつつある。

（一）

階級闘争は、その世界性にも拘らず、世界的指導部をそう失して久しい。

レーニン、トロッキーによって創設された第三インター（コミンテルン）は、世界革命、世界プロレタリア独裁樹立の革命党に打ちきたえられるのではなく、単なるソ連防衛の道具に転落させられ、ソ連の変質とあいまって、一九三〇年代国際階級闘争の敵対物になりはてて、遂には自己解体していったのであった。

スターリンとその一派、ソ連共産党は、コミンテルン解体後も、一貫して、各国階級闘争とその指導部を、ソ連防衛、ソ連外交の道具としてひきまわし、一度たりとも、世界階級闘争―世界プロレタリア独裁樹立の方向を追求したことはなかった。そもそも、ソ連一国「社会主義」の防衛しか頭にないこの官僚共は、世界プロレタリア独裁樹立こそが、さしあたっての共産主義の任務であることを放棄したどころか、各国における階級闘争、帝国主義打倒闘争の徹底的推進のみが、帝国主義の反革命からソ連を防衛できる唯一の路でもある弁証法を理解できず、「独ソ不可侵条約」に端的に示されたように、ブルジョア政治で、自国防衛を計り、各国階級闘争にこのブルジョア政治の「支持」をおしつけることによってこの階級闘争を崩壊させてしまったのである。

この結果、即ち、各国階級闘争の崩壊によって、帝国主義は、その本性を一層むき出しにさせ、反革命力を強めると共に、ソ連自体もこの帝国主義の包囲下で、いよいよもっと、変質を余儀なくされたのであった。

スターリン死後も、ソ連共産党の世界階級闘争に対する「指導」の基調は、何一つ変わるものではない。それどころか、一国プロレタリア独裁樹立として端緒的に形成された過渡的社会を、党の堕落と官僚の発生によって疎外させ、更には、資本主義への反転すら、一部分、おこさせつつあるのだ。

（二）

中国共産党、毛沢東は、ソ連共産党のボス交政治に反発しつつも、帝国主義各国階級闘争に対して、自国帝国主義打倒闘争を提起するのではなく、中国の敵、米帝国主義との闘争、即ち、反米闘争のみをおしつけ、その階級指導の戦闘性にも拘らず、指導内容は、スターリン的となっている。

だが、中国における文化大革命は、一国におけるプロレタリア独裁の樹立とは、今なお、革命のほんの端緒にしかすぎないことを明らかにし、革命を不断の連続革命として提起、実践していることにおいて、ソ連派スターリン主義者を突破している。しかし、この点においても、彼らにおける革命の未来は、「自力更生」→「中国共産主義」にしかすぎず、共産主義が「世界単一共産主義」においてしか存在しえないということについての把握が、極めて、補足的二義的にしかなされておらず、いわば、ベターとして確定されているにすぎない。かかる「理論」においては、世界革命は、共産主義実現のための必要不可欠性として理解されないが故に、実践的には国内建設の優位において追求され、更には、一国社会主義防衛のための各国階級闘争の悪しきひきまわし従属化をやることになるのである。

（三）

ところで現在、公認共産主義運動は、中ソ両指導部の他に、自主独立派なる部分をうみだしている。西欧では、伊共産党を筆頭とする諸党がこの動きを示し、東洋では日本の諸党が「自主独立派」をとなえている。

今、この「自主独立」派の内実を見るに、それは、決して、革命的階級的原則への回帰ではない。それは、二重の意味において、共産主義からの「独立」として立ち現われている。

一つは、この「自主独立」とは〈暴力革命・プロレタリア独裁〉のマルクス主義の真髄を放棄した第二インター・社会民主主義への後退（共産党の第二社会党化）であり、二つに、この「自主独立」とは、人類史の開始、共産主義を世界単一共産主義実現においてとらえるのではなく、中ソと同様、一国的にとらえ、ここから、かってのエセ・プロレタリア国際主義の欠如となるに至っている。

（四）

公認共産主義指導部のかかるスターリン主義的、社民的転落とそれによる世界的階級闘争の危機にって、われわれこそは、かかる状況を突破する革命的な奔流である。

アルジェリア解放闘争、キューバ革命戦争の伝統をうけつぐベトナム人民の英雄的な解放戦争、中南米大陸におけるゲリラ戦争、合衆国における黒人同胞の都市ゲリラとベトナム反戦闘争、フランス五月の革命的高揚、西独SDSの闘い、チェコ人民の決起、そして日本におけるゲバ棒、火炎ビン、赤ヘルメットの強力な安保粉砕闘争――われわれの闘いは、暴力性をもって、自己を貫く、議会や、平和共存、構造改良ではなく、「組織された暴力」、これこそが階級闘争を勝利的に推進しぬく。

われわれは、世界階級闘争のいたるところでほとばしり出ているこの革命的な奔流が、国境、民族、人種のカベをうちやぶって一つに合流させうるべきことを主張する。それは、共産主義実現のための根本条件なのだ。

真の人類史の開始としての共産主義は、世界共産主義としてしか存在しえない。（これについては別論文であらためて論ずる）。そして、人類は、この共産主義の獲得のため、世界プロレタリア独裁世界社会主義を通過しなければならない。

現代世界とは、この世界プロレタリア独裁として実現されるべきさしあたっての目標にむかってつき進みつつある歴史局面、即ち、①一国プロレタリア独裁を樹立しつつも官僚的に固型した「労働者国家」②国家独占資本主義として延命をはかっている現代帝国主義③全面的恒常的危機に浮き沈みする後進国の三ブロックからなる歴史的複合の時代をなす。

われわれは、現代世界を、革命達成部分と未達成部分、あるいは達成したが堕落したとする部分と未達成部分として把握することに反対する。かかる思考は、その革命の未来をせいぜい一国における政治権力の奪取においてしか把握しえていないところへ近視眼とその近視眼からの世界規定にしかすぎない。わが革命の未来とは、唯一、世界共産主義であって、帝国主義国、後進諸国は勿論、中ソ圏のいずれもが、まさしく、この世界共産主義にうちむかうべき歴史的過渡的存在であり、現代世界は三ブロックの複合性の統一としての歴史的一時代＝過渡期世界をなす。そして、この現代世界の世界プロレタリア独裁＝世界社会主義―世界共産主義への歴史的起動力は、各ブロックを問わず、階級闘争である。現代過渡期世界にあっては、その階級闘争が、三ブロック階級闘争として、形態区別性を有するが、従来、この形態区別性が、とりわけ中ソ圏における階級闘争の存在と必要性の認識をあいまいにさせてきた。だが、階級闘争は、世界社会主義にいたるまで間断なく目的意識的に推進されなければならず、「労働者国家」の過渡性の止揚―世界プロレタリア独裁への前進も、階級闘争によってなしとげられる。

われわれは、現代世界を、反帝国主義、反スターリン主義という形で、個別二者的にとらえることに反対する。現代の個別二者は、世界共産主義の未来からの逆規定をうけることによって、歴史的過渡としての自己存在をうきぼりにさせ、世界共産主義にむかう階級闘争の歴史的過渡的段階として、まさにこの内実によって、現代を過渡期世界たらしめている。

それ故、われわれは、わが過渡期世界に対して、次のテーゼを基本指針として提起する。

“先進国・後進国・中ソ圏・三ブロック階級闘争を、世界同時革命、世界共産主義の勝利へ！”

（五）

われわれが冒頭において、革命闘争の世界的統合を提起した所以は、今や、鮮明である。それは、階級闘争の世界性なる現実に依るのみならず、なによりも、共産主義の世界性―革命の未来からの規定をうけた必要不可欠の結論である。

しからば三ブロック階級闘争の結合――世界プロレタリア独裁（世界同時革命）への前進は、何によって可能か。

三ブロック階級闘争は、それ自体としては、無媒介的に結合するものではない。それは、三ブロックの階級闘争を領導する前衛諸党の国際的結集と世界単一党への自己止揚、即ち、世界党の領導によってのみ、世界階級闘争としての結合と世界プロレタリア独裁（世界同時革命）、世界共産主義へつき進むことができる。かくして、上述の基本テーゼは、次の組織テーゼをもって全体をなす。

“世界プロレタリア独裁、世界同時革命、世界共産主義の旗の下革命的インターナショナルを建設しよう！”

すなわち、レーニンによってはじめられた世界党建設の闘いが、再開されなければならないのだ。そして、実際、世界階級闘争の現段階とこれを規定している現代世界の危機は、かかる党的主体へ建設をのっぴきならない課題として我々につきつけるに至っている。

（六）

第一次大戦、二九年大恐慌、第二次大戦の一大危機をくぐりぬけてきた現代帝国主義は、その危機への対応において、先行的予防、積極的なしくずし性を、その特質とする。

危機の一挙同時的爆発とこれへの対応ではなく、まずもっての、危機への前段的攻勢的対応――これが、古典的帝国主義世界から過渡期世界に移行した現代における支配階級の階級政策であり、それは、権力政体的には、なしくずしファシズムとして把握すべきものである。

だが、このなしくずしファシズムは、その内実が、国際的な同時歩調性の先行性侵略・抑圧・反革命であるが故に、階級関係を不断に緊張させ、この攻勢に対決する階級闘争を不断にうみだし、この階級攻防におけるわれわれの主体的突出に媒介されて、一つの国際階級危機に煮つまらざるをえない なしくずしファシズムは、これに抗する革命戦争を対極にうみだしこの革命戦争は、後進国から先進国へ、世界革命戦争へと拡大されつつある。国際階級危機が前期的成熟にある。この危機の基底は、帝国主義の不均等発展の法則である。

帝国主義の不均等発展――米の相対的地位の低下、各国の力接近、帝国主義の対立と抗争は、まず後進諸国の危機（帝国主義闘死闘にかちぬくために帝国主義の搾取収奪強化）、更に、帝国主義国内抑圧強化をもたらしている。

そして、第三に、かかる後進国の激動、先進国の流動が、スターリン主義官僚体制の腐敗、堕落と相まって、「労働者国家」に流動化をおこさせている。

かかる危機は、古典的には、恐慌、戦争へと煮つまったところのものであるが、既述の通り、現代帝国主義の予防的先行性は、危機の前段にあって、すでに階級攻勢を全面化させ、それに抗するプロレタリア人民の闘いとその攻防をなす階級危機を現出せしめつつある。

われわれは、過渡期世界のかかる独特の危機に対する基本テーゼ・組織テーゼの三ブロック別具体化として、次のテーゼを提起する

“帝国主義の侵略・抑圧・反革命と対決し、国際反帝闘争を世界革命戦争、世界プロレタリア独裁へ”

“民族解放・プロ独の武装戦列を強化し、国際反帝闘争、世界革命戦争、世界プロレタリア独裁へ”

“スターリン主義官僚打倒、プロレタリア独裁復活をかちとり、世界革命・世界プロレタリア独裁樹立の最前線へ”

そして、われわれは、この三ブロック・テーゼ実践の現在的政策的環として“安保・NATO粉砕、ベトナム革命勝利、ワルシャワ条約解体”のスローガンをかかげてきた。

即ち、日本にあっては、このスローガンは、より具体的主体的には、「安保闘争を日帝打倒、世界革命戦争・世界プロレタリア独裁へ」として確立されるべきものであり事実、67年10月8日佐藤訪越阻止闘争以降、武装闘争をもって圧倒的な前進をかちとってきた安保闘争は、かかる方向性を鮮烈に貫いてきたのである。

日本における安保闘争は、11月佐藤訪米を前に、決戦的状況をむかえつつある。われわれは、この安保決戦を、先進国における世界革命戦争の開始、本格的武装闘争の開始として闘い抜き、日本帝国主義打倒・世界革命戦争の現実性をわがものとするであろう。しかも、われわれは、日本における革命闘争の推進のみならず、全世界三ブロックの階級闘争の結合と世界同時革命・世界プロレタリア独裁樹立を領導しぬきうる世界党建設のために、革命派の全世界的結集をかちとっていくための闘争にこの八月国際反帝集会を通して、決定的に踏み入っていきたいと考える。

10・11月へ戦闘態勢を確立

社会主義学生同盟全国委員会

全国の兄弟達！

七月二十三日、全国から結集した革命的戦士・戦闘員によって息づまる熱気の中に、社学同全国大会は遂に克ち取られたことを報告する。七月二十二日全国委員会に於る論争を受けて、大会は革命的論争を呼び起し、“十月安保決戦を、日帝打倒、世界革命戦争へ！世界プロレタリア独裁を樹立せよ！”の革命的スローガンは、同志の胸深く刻印され、十月血の叫び声とともに、世界革命戦争の開始が全世界のプロレタリアート人民に告げ知らされることとなろう。

何よりも全国大会が問い続け問題にしていたのは、第一に、鉄のボルシェヴィキ党建設にとって、党内闘争―分派闘争を如何に組織するのかということであり、党内闘争に於る自然成長性と対決し、「如何なる党」を、如何にしてうちきたえ、非合法ボルシェヴィキ党建設への同志的結合を党内闘争に於て如何に組織するのかということであり党組織論を巡る論争として展開された。それは同時にプロレタリア独裁とは何かという問題として存在するものとして把握されねばならないだろう。第二の問題は、過渡期世界論―世界同時革命戦略を立場から解き放ち、戦略、戦術のメルクマールとして、世界革命戦争論への接近として過渡期世界の運動法則の解明と、世界革命戦争―世界党―世界プロレタリア独裁樹立の戦略論争として討論が組織されていったことである。

第三に、「なし崩しファシズム」を巡る現代帝国主義論の解明が、国際管理通貨制の持つ意味と国独資の位置付けを媒介として過渡期世界に於る帝国主義諸政策を規定する経済的政治的権力的動向の現在的質は如何なるものとして把握されるのかということであった。

第四に「中央権力闘争」の内実規定巡って、過程として、戦術としての中央権力闘争を否定的に総括するなかから、68年4／26防衛庁10／21防衛庁、11／7首相官邸69年4／28霞ヶ関政府中枢攻撃中央権力闘争を「単に中央政治闘争」であったなどと言って客観主義的に評論することではなく、中央権力闘争―武装蜂起（＝権力奪取）の戦略的革命の型への接近にとって、党―赤軍＝自衛武装―ソビエト運動（イコール ソビエト ではない）を如何に組織し得なかという問題として存在した。

第五に、党と軍事―非合法の問われている諸問題が、党と、党による軍事が占める位置を、「武装蜂起の党」「軍事の党」として党の役割を武装蜂起の一点に解消してしまおうとする見解に対する批判が、党建設（世界党）党活動とそこにおける赤軍建設―軍事問題（世界革命戦争）を、前者が後者に溶解してしまうのではなく、革命党建設にとって、決定的な赤軍建設を自然成長的自衛武装との結合において如何に把え返し、そして、また帝国主義軍隊―反革命同盟軍隊を、世界党―世界革命戦争―世界プロ独の内的関係の解明として如何に把えかえすのかという問題として討議が進行した。

〈第一の問題〉に関しては、ボルシェヴィキ党が不断の党内闘争とともに成長し飛躍していくものであるということ自身はわれわれの前提として確認されねばならない党組織論上の原則であるが、問題なのは、不可避的に発生する革命論上の共産主義論、戦略論、運動組織論の対立点を、鉄のボルシェヴィキ党建設非合法の時代に於る党内闘争の方法を胎現するものとして、その基準―出発点が確保されねばならないのである。党内闘争が、別党コースと当初より二重移しにして展開されるという傾向が生み出され、党公式会議―党中枢を物理的に解体し―別党コースというクーデター型党組織論をもって自らの党組織路線として把握する諸君に対しては何よりも共産主義者としての主体的立場を問うことが要請されるのであり、共産主義の主体的意味を、同志的結合の底流として組織していこうとするわれわれにとっては、敵対物以外の何物でもありえないのである。

われわれは、BUND解体―新共産党組織路線―物理的セン滅―クーデター型党組織論が何故に発生していったのかという問題を、主体的に、われわれが何故にこのような党組織路線を許容し集約し得なかったのかという問題として解明されねばならないことを主張していったのである。死滅しつつある「赤軍派」に結集してきた諸君！われわれは諸君が鉄のボルシェヴィキ党建設の戦線に自己批判→結集することを呼びかける。われわれは排外主義的に党を組織していこうなどという発想や、セン滅とは無縁なボルシェヴィキ党派である。

〈第二の問題〉は、理論戦線八号における革命論―方法論の主体的立場の解明として提起された日向論文の総括的深化として提起されている問題に帰着する。マルクス「資本論」を普遍本質論として、レーニン「帝国主義論」を特殊段階論的本質論として、現代過渡期世界論を特殊段階論的本質における現実形態論をして確定してきた我々は過渡期世界論を「現代帝国主義論」と「現代過渡期社会論」を二つのガイストとして認識していくことを主体的立場として解明してきた。我々は、かかる主体的立場が今日、世界革命戦争―世界プロレタリア独裁→世界社会主義→世界共産主義を、主体的に担う党主体として、その実態的解明を、戦略戦術を導き出す指標として過渡期世界論を確定していくことを呼びかけてきた。そしてそれは、疎外された過渡期社会における歴史的位置の解明と分離した地平において、疎外された過渡期社会の物質的基礎が、ブルジョアジーは存在していないが資本主義的商品経済が存在しており、従って疎外された過渡期社会を含めて過渡期世界における三ブロック統一世界市場なるものが存在しているとする立場に対する痛烈な批判として、疎外された過渡期社会の分析を、革共同流の“あるべき姿”と対比して、どれだけ違っているのかを解明して反スタの立場を明らかにするものでもなく、また単に物質的基礎を疎外された過渡期社会の歴史的位置と、帝国主義との交通諸関係―原始蓄積の脆弱性を捨象した地平に位置付けられるものではないということを明らかにしてきた。

我々はかかる論争を媒介としつつも、戦旗前前号における社学同全国委論文において、提起されていた①個別闘争論の内実として、個別闘争の徹底化→大学批判から市民社会批判へ、市民社会批判から国家批判へというラポーチェ、デーロまがいの経済闘争に政治性を付与せんとする、恐るべき経済主義に対する闘いとしても組織した。②全学連運動を解体し、全国全共闘に吸合せよとしてBUND―SSL―全共闘という組織を意図する傾向に対して、全学連解体過程の党指導性の統一戦線問題における弱さの総括と、それが現在的には、全共闘Mとしてしか形成し得ていないと限界性を固定化してしまうのではなく、あくまでも全共闘が、現在的に表現されている過渡的な組織にすぎないことを意志統一し、それらが、学生別全国組織として結合することの中に革命性とソビエトへの飛躍があるのではなく、中央権力闘争―マッセンストライキを担う変革主体の一翼を形成する為に、地区労学行動委員会運動への個別闘争の枠をうち破り、労働者階級との運動・組織的結合を、地区武装行動委員会―地区ソビエトMへと高めていく党における進備と全共闘への政策が問われているということを提起 してきい のである。かかる過程を通して全国委員会においては、そのような立場をとる傾向も実態的に止揚したのである。

全国全共闘の政治的組織的過渡的意味を、我々は党―反帝統一戦線の主体的総括として把え返し、学生運動の総花的全共闘レベルに反帝統一戦線を低めるのではなく安保決戦を担う革命的政党間統一戦線として、その下に、大全学連建設への過渡的現在的表現形態が全共闘であるという党的位置を鮮明にし、全共闘の革命的再編を行うということである。

党は、大衆の自然発生性と対決するのみならず、指導に於る自然成長性とも対決していかなければならないのである。

全国同志諸君！人類史の地平を揺り動かし、全世界が武装せる労働者によって世界革命戦争が勝利するその日を目指して、赤熱の闘争を展開せよ！十月安保決戦を準備し、ボルシェヴィキ党建設、共産主義突撃隊建設、全共闘の革命的再編―大全学連・地区労学行動委員会への再編を獲得せよ！九月上旬社学同全国大会、全学連第二一回定期大会に結集せよ！

大学立法粉砕へ二千が結集

7・26全都共闘が緊急抗議闘争

七月二十六日、前日の入管法闘争で確認したように、会期を大幅延長した今国会においては、軒並み強行採決によって、防衛二法、健保特例法延長、入管法、大学立法等が国会を通過されようとしており、大学立法も文教委―衆院本会議において強行採決されんとしている緊急事態を迎えて、全都全共闘の緊急抗議集会―デモが、午後三時より、明大記念会館講堂で全都二千名の学生を結集して開催された。

国会での緊迫した事態が迫る中での本集会は、再度、大学立法が安保・沖縄のブルジョア的集約に一切が集中されている佐藤帝国主義政治のなしくずしファシズム的帝国主義的再編の一環として、大学立法攻勢があることを確認し、とするならば、七〇年安保が今秋佐藤訪米時に決戦を客観的にも、主体的にも迫られるという事態がますます明白になっている現段階において、この今秋安保決戦を目指す闘いとして大学立法諸学園バリケードストライキ闘争があることを確認するのが第二である。

第三には、学園バリケードストが、まさに、国家権力打倒を永続的に追求し、創造されるべきソビエトの萌芽として目的意識的に組織化されなければならないとするならば、現在的には、有機的な対国会闘争への拠点たらしめると同時に、否、むしろ、大学立法を媒介にして対国会闘争が要請されていることは、ただ単に、それに応えることが中心的任務なのではなく、「政府打倒―権力打倒」の即自的表現として対国会闘争があるのであり、「大学立法を粉砕するには佐藤を打倒しなければならない」と当然にも考えている先進的学友に対して「では何故に佐藤を打倒しなければならないのか、そもそも佐藤政府とは何なのか、いかにしたら佐藤政府を打倒することができるのか」という問題提起を投げかけることによって、革命的左翼の独自の戦略にもとずいた宣伝、煽動、暴露を受け入れる基盤を広範に形成しつくすこと。このことは、当然にも今秋安保決戦にとっての学園パリ・ストの意義を問い返すものであり、パリ・ストの目的を鮮明化せざるをえないものとなる。ここにおいて初めて、学園パリ・スト―大学立法闘争に対する革命的左翼の「指導」の質が全面的に問われてくるものとなるのである。

われわれは、今秋安保決戦が訪米前における中央権力闘争とマッセンストとして、それが明確に「佐藤帝国主義政府打倒」を掲げ七〇年代政治危機―革命的危機を展望しうるものとして闘い抜かれねばならないことを一貫して主張している。まさにかかる質の闘いを実現し抜くために、学園闘争を闘い抜いている先進的学友は、共産同―社学同に結集し、その統一指導を媒介に、中央権力闘争の軍団を形成し、地域労働者との組織的結合地区労学行動委員会として推進しなければならないことを全面的に明らかにしているし、そのことを可能ならしめる共産同―社学同の組織的再編をかちとりつつあるのである。

今秋安保決戦を迎えて、かちとられんとしている全国全共闘は、革命的左翼の介在によって、反帝統一戦線を大衆組織レベルでより強固にうち固めると同時に、以上のような全共闘運動の発展の方向性をめぐる熾烈な党派闘争、ノン・セクト層の組織的獲得の場としていかねばならない。

全学連を代表して木多君は、以上のような内容で基調を提起し、論争を牽引した。

中核派は「首相官邸占拠―羽田へ」「プロ学同・フロントは中央反政府実力闘争―ゼネスト」、反帝学評は、ますますノンポリ化し「全国全共闘結成を」のみ語るという。総体としては、今秋安保決戦を如何に闘い抜くのかということが革命的左翼の死活を問われるものとしてあることに対して、遅ればせながら、回答が与えられ論争が開始されだした段階であり、ノン・セクト層が、革命的左翼の発言に注意を傾けていることを示した。だから、稀少な、中核派と反帝学評の「イサカイ」には弾劾の嵐が巻き起ったのである。

集会後、駿河台一帯のデモが国会に向けて開始されんとしたが、官憲はこの「無届けデモ」に対して「全員検挙」を対峙する弾圧をかけてきた。今秋安保決戦においては、必らずや、官憲の部厚い壁はぶち破られるであろう。

東京で三千の戦闘的デモ

7・25入管法粉砕第三波闘争

七月二十五日、「出入国管理法粉砕、第三波全国統一行動が、各地で闘われた。

東京の闘争は、午後六時、明治公園に三千名の反戦、全学連、全共闘の部隊を結集し、集会後国会への抗議デモとして闘われた。

六・二四の第二波闘争から今回の闘争の一カ年間は、国会での強行採決、「入管法」成立の可能性が強まっていったにも拘らず、闘争の総体が質的に飛躍できぬまま一定の停滞を招いたものであった。このことが、華僑青年共闘を始めとする直接弾圧の対象となっている在日外国人の闘争を痛烈な闘いへと追い込んで来たのであった。

このような在日外国人の苦闘（ハンストを含む）を主体的に受けとめ「入管法」闘争を真に排外主義と他民族抑圧に対決し、日帝打倒の国際反帝統一戦線の強化へと突き進めていこうとする闘いとして七・二五第三波全国闘争が闘われたのである。

従って、集会では、全学連、反戦その他の諸組織の代表は、秋の安保決戦へ向けて入管闘争を位置づけ方針を提起した。入管闘争を安保決戦へ向けて、政策阻止の闘いから、立法粉砕、日米安保（反革命同盟）粉砕、日帝打倒の闘いと結合されていかねばならない。

当日の闘いは、権力の弾圧で五名の逮捕を行なった。そして、今回の闘争で始めて、在日朝鮮人代表が連帯の報告を行ない、在日朝鮮人民の公然たる反日帝闘争が日本の反帝派との革命的連帯を発展させつつあることを我々は確信させた。

このような日本、アジア人民の国際連帯を発展させている入管闘争の全国的発展は、日帝権力の「入管法」強行成立を今国会では断念させる局面を切りひらきつつある。

しかし、政府は、秋の臨時国会での強行を策謀し、ますますこの他民族抑圧、排外主義の攻撃を強めてくるであろう。我々の入管法闘争は、前述の如く、日帝打倒に向けた強力な戦列で、「入管法」闘争に結集した外国人を結集し、国際的闘争として、闘いを発展させていかねばならない。

自衛隊第一師団治安出動粉砕！

7・27練馬・文京反戦が決起

【都北部分局】七月二十七日、練馬・文京両反戦を中心とする北部地区の赤ヘル反戦四〇名によって、練馬区にある自衛隊第一師団司令部に対する闘争が、豪雨をついて闘われた。

自衛隊第一師団は、訓練時間の多くが治安出動訓練であるといわれるように、完全に内戦用部隊であり、10・11月闘争において、われわれが機動隊を突破したとき登場してくるのがこの部隊である。北部の赤ヘル部隊は、この第一師団の治安出動に反対するばかりではなく、10・11月闘争を、自衛隊解体をも具体的に提起していくものとして闘い抜く決意をもって、7・27闘争を闘ったのである。

安保決戦への進撃を決意

7・28反戦総決起集会かちとる

「7月28反戦総決起集会」は、28日、明大学館五階ホールに青年労働者、高校生を結集してかちとられた。

まず、司会から集会でかちとる内容が、第一に、4・28闘争以降の総括であり、第二に、日米貿易経済合同委員会粉砕闘争の意志統一と、第三には、今秋安保決戦を70年代階級闘争の権力闘争への飛躍をかちとる内容を意志一致しなければならない。と提起された。

最初に、新たに反戦の先頭に立って指導していく東京反戦下原世話人から基調が提出され、第二期反戦運動の域を突破できず、東京部議会選挙などで明らかに暴露された革共同中核派の人民戦線左派への転落のなかで、赤ヘル反戦が安保決戦を中央権力闘争―マッセンストとして、大担に党派闘争を推し進め、70年代階級闘争を担う責任ある部隊として闘い抜こう、と報告された。

続いて、4・28闘争を反戦労働者の最先頭で闘い、全学連との固いスクラムをもって登場した共産主義青年同盟全国委員会の決意表明がなされ、日帝の安保―沖縄―ASPACに明らかにされた安保決戦の政治的内容を、革命論から把えかえし、中央権力闘争―マッセンストを指導する党形成を闘いとり、共青が青年労働者の闘いを担っていこう、とのあいさつがなされた。

4・28闘争以降の極めて厳しい情勢のなかで、社民への屈服、人民戦線派への転落、戦線逃亡という東京反戦の混乱に、いち早く今秋安保決戦に真紅の旗を守り抜いて圧倒的に登場する闘いを進めている各地区反戦から、熱烈な闘うあいさつが、台東、渋谷、港、練馬、千代田、小金井反戦からなされた。

最後に、全学連の学友の安保決戦にむけた闘いの方針と決意表明をうけて、全員で全学連―反戦の強固な意志統一を確認した。7・29ロジャース闘争への行動方針を確認し、第二回国際反帝会議を圧倒的にかちとることを意志統一して、シュプレヒコールとインターナショナル斉唱で閉会した。

THE SEN-KI
（英文）No.5（7月10日発行）
オフセット印刷
■世界革命戦争へ
■日本帝国主義のアジア侵略
定価 70円（〒共）
マスコミ、諸団体は 3部 500円（〒共）
■外国の同志、友人と闘争情報を交換しよう！
■外国への手紙に THE SEN-KI を同封しよう！
■学園・職場に世界革命研究会をつくろう！
共産同国際部発行

共産主義者同盟パンフ
4・28安保沖縄闘争
発売中 一五〇円
千代田区三崎町二―七―六 滝沢ビル
TEL二六四―二九六一
戦旗社

10・11月安保決戦へ進撃せよ！

総評大会 民同指導部安保決戦を回避

共産主義者同盟労働者組織委員会

組織労働者四五〇万人を傘下におさめ、五〇~六〇年代の日本労働運動を（まがりなりにも）組織的に代表してきた総評は、いま、さし迫る安保決戦にどのように対応しようとするのか。

七月二〇日から五日間、東京・文京公会堂で開かれた総評第三八回定期大会で、岩井事務局長が支配する本部および各単産幹部は、今秋の佐藤訪米期に煮つまろう決戦を闘いぬく何らの明確な方針もついに打ち出すことはなかった。ストライキのかけ声がなかったわけではないが、それも〝経済的諸要求との結合〟という不確かな名目をかぶせて結果的に〝安保〟がかき消される程度のものでしかなかったし、何よりも、六七年10・8以降の実力闘争を切り開いてきた全学連ー反戦の反帝統一戦線の戦列を〝排除〟し、あるいは〝全国反戦を凍結〟すると決議することによってついに労働者の最大部隊の組織的頂点にたつ総評は、安保闘争の中で自ら占めるべき位置を放棄してしまったのである。

（総評民同幹部の〝革命的左翼排除〟〝反戦凍結〟決定やその指令によって、反帝統一戦線と広範な労働者大衆との結合がいささかも絶たれるものでないことは、反帝戦線に結集した反戦派労働者が最もよく承知している。全国の全産業の生産で日夜の実践を通じて安保決戦を主体的に準備している幾千の先進的活動家は、正当にも総評民同のかかる決定は、安保決戦を組合主義的ゼネストに幻想をもつことなく中央権力闘争＝マッセンストとして実現すべき方針を、さらに力強くおし進めるための警鐘と理解しつつあるのだ）。

1

岩井を頭目とする総評民同は、いま安保決戦を注意深く回避しようとやっきである。五日間の大会期間中彼らは、そのために多くの詭弁を弄し冗長な議論にあけくれた。われわれはここで、労働者階級を愚弄する彼らのいい分の一つひとつを俎上に乗せるまでもない。ただ、彼らが安保決戦を回避するために用意した中心的な論点を明らかにしておくことで（それはもはや理論的批判の対象ですらないが）十分だろう。

その第一は、七〇年安保闘争のヤマ場を来年六月に設定する俗見である。社民としての彼らの思想的立場からして、七〇年安保における沖縄の位置を、日帝のアジア侵略反革命の前線基地化として十分に把握しえないのは問わないとしても（ここでは彼らの「返還」論の民族主義・排外主義的傾向を直接問題とはしない）、沖縄闘争を安保の中心スローガンとする彼らが今秋の闘争をスルリとかわすことによって、結局安保決戦を回避する悪どい狙いを見逃すわけにはいかない。この六月にわざわざ沖縄まで出向いて開いた単産委員長会議でも、闘いのヤマ場を今秋に設定せよとする沖縄側意見に対して、総評は強引に来年六月説を主張した。〝七〇年六月ヤマ場説〟こそは、二・四沖縄ゼネスト回避策動に引き続く総評幹部の沖縄人民切り捨ての第二弾〟であり一〇~一一月闘争へ職場＝地域から決起しようとする労働者大衆への官僚的統制への一大布石なのである。

そして第二に、七〇年代闘争を無内容に口にすることによって、七〇年六月なる彼らの設定したヤマ場すら無意味なものとしていることである。代議員の質問に答えて岩井事務局長は語るーー七〇年の六月段階は、決戦ではない。結局は七〇年代に安保廃棄の革命政府をつくることだ、と。つまり、彼らにあって安保闘争とは、もはや六九~七〇年に闘われるべき大衆闘争ですらなく、社会党の衰退によって実現の見込とてない〝革命政権〟のための選挙運動にしかすぎないのである。

このように安保決戦回避に走る総評民同にも、危惧がないわけでない。佐藤訪米期に煮つまろうと政治情勢を直感して、反帝実力部隊に牽引されつつ闘争を決意した広範な青年労働者が〝暴走〟しはしないかと、彼らは案じるのである。総評傘下の全単産で、あらゆる職場で、「闘わない総評」への批判が高まっている。先進的活動家はすでに、組合の統制を蹴って今秋の安保決戦期に向けて職場ー地域からのスト体制を築きつつある。かかる事情からして当然、反戦青年委を中心とする青年労働者問題が五日間の大会議論を貫く中心テーマとなったが、この小田原評定の結論は既述の〝革命的左翼排除〟〝反戦凍結〟によって青年労働者を組合主義的統制の枠内に封じこめることであった。

ただ、単純な決戦回避方針だけでは、すでに進展しつつある下部大衆の決起の準備を抑えることはできない。〝反戦が強い〟官公労においては、とくにこの事情は考慮されなければならないーーかくして、今秋には国労、動労を中心とする交運スト、来年六月にはゼネストなる提起が必然化された。しかし、総評のスト戦術が前に述べた安保決戦回避の総路線に裏付ちされたものである以上、それ自体で国家権力への迫力を持ちえない「抗議」形態にしかすぎぬことまたそれの決行すらもがかかって下部大衆の反帝実力部隊と結合した決起いかんによっていることを見抜いておかねばならない。

[illegible]、総評内各単産の七〇年安保への対応は、ほぼ三傾向に分類される。第一は（総評主流を形成する部分だが）社共共闘派であり、前述岩井の方針をほぼそのまま支持し、七〇~七〇年代における人民戦線＝秩序派の中心である。第二は、動労、都市交自治労など総評大会に反戦対策などで修正案を出した単産であり、支配階級の交通運輸通信の帝国主義的再編攻撃をまともに受け、下部からの激しい突き上げがある部分。第三は鉄鋼労連に代表される総評から離れ（IMF・JCグループとして行動）社会党の反安保実行委に加わらないばかりか、安保維持、体制擁護の路線に歩むもの。総評が七〇年をどう闘うかにかかわらず、かかる分化・対立は今後一層顕在化せざるを得ないだろう。

2

七〇年安保ー七〇年代階級闘争を前に、〝総評の危機〟はますます深まっている。五〇~六〇年代を通じて、日本労働運動の主座に君臨してきた総評民同路線は、その破産がいまや現実化し、「七〇年後の労働戦線再編」（全逓・宝樹）が大会で公言されるほどの状況を現出せしめているのである。

問題は、かかる事態を労働運動の右傾化や危機一般として論じるのでなく、七〇年安保ー七〇年代階級闘争を担いきる階級形成の路線として明らかにすることが、革命的左翼に問われている課題といえよう。

そのためには、われわれにとっては既に自明のことなのだが、七〇年~七〇年代における権力再編（そのファシズム的転換）の確認から始めねばならない。すなわち現代過渡期世界における帝国主義の危機の成熟は、一方では諸列強に侵略反革命の強化を必然化させながらも、他方古典的な民族排外主義のみでは国民を結集しえないこと、従って史上三度目の世界市場分割戦に入った現情勢下にあってブルジョアジーには政治権力のファシズム的性格への転換がその死活にかかわる課題となっている。かつての政治支配体制によっては七〇年代の国際階級危機においてその支配を貫徹しえないが故に、政治権力を頂点とする全社会機構の帝国主義的再編が不可避とされるのである。

ーーわれわれがいま問題としている労働戦線の分野にこれをひきうつしてみれば、こうであるーー。

戦後激動が反動的収束をとげる過程で、反共民同運動として成立した総評は、日本資本主義の相対的安定局面にあってその支配体制（戦後民主主義）に組み込まれることにより組合主義的展開をおしはかってきた。もちろんこの過程は決して一様でなく、とくに日本資本主義の脆弱な条件下で五〇年代~六〇年代初頭にかけての産業合理化をめぐる紆余曲折を経ながらも、総体としては経済主義ー経営協議会化の資本の敷いたコースを歩んできた。民間基幹産業におけるIMF・JCの席巻こそは、その指標となるものであった。だが、支配体制の帝国主義的再編下にあっては、いったんは既存支配体制下に組み込んだ労働組合の解体ー政治的再編が進行する。民間大基幹産業におけるJC・同盟もブルジョアジーにとっては経営協議会としてのその育成の段階から強力な体制擁護者への政治的再編（かかる意味での帝国主義労働組合化）が問題となっているのであり、鉄鋼労連の安保体制擁護をはかる一連の動きも、この間の事情を物語るものである。

官公労にあっては、社会資本部門の合理化の一定の遅れから、民間基幹産業のような労働組合の経営協議会化はいまだ完結していない事情のもとで、こんにち、国鉄五万人→一六・五万人合理化、動労EL・DL助手廃止、郵政EDPS導入→公社化、電通第四次合理化、専売二万人合理化、都市交自治労の合理化など一連の帝国主義的再編が進行している。そしてわれわれがこの攻防を「官公労決戦」と特徴づけるのは、それが単に、民間に遅れた社会資本部門の経済的再編というにとどまらず、権力にとってはこの大規模な攻撃を通じて官公労の解体→政治的再編（帝国主義労働組合化）こそが課題となっていること、この攻撃の延長上に帝国主義的全社会機構の再編＝統制経済が設定されているが故である。七〇年安保の政治内容が、七〇年代国際階級危機に対応する侵略反革命の強化と、それを貫徹すべき政治権力の先行的ファシズム化にあるとすれば、当面する労働戦線の焦点＝官公労決戦とはまさに安保決戦の一要素であり、従ってそれを単なる合理化＝労働強化反対という組合主義的レベルで見通すことでは、いっさいの展望は見失なわれる。闘いはまさしく、一〇~一一月を一大決戦時期とする安保闘争そのものとして、ブルジョアジーの権力再編に対するプロレタリアートの権力闘争として闘い抜かれねばならないのだ。

七〇年安保~七〇年階級闘争を控えて全面化した〝総評の危機〟とは、かかる攻防に対応しえないことに帰結される日本的組合主義の破産であり、まさしく近い将来にその組織的崩壊までが見通される深刻さをもつものである。

3

以上見てきたように、政治権力の性格の先行的ファシズム化は、当面民間基幹産業分野においては経営協議会の政治的再編（体制派への移行）、官公労においては解体→再編として、労働戦線全体の支配転換をもって進行している。さらに一般化するなら、これまでの＜権力ー資本ー大衆＞という支配形態から、権力の直接的大衆支配への移行である。

従って、現段階における階級形成の問題を、改良闘争の徹底化という組合主義的展望においてみること（例えば反合闘争の中から大衆の〝左翼バネ〟を期待し、それを階級化する諸傾向。安保ゼネスト論はかかる立場の結実である）はもちろんサンジカリズムに堕したコンミューン運動（権力闘争を抜きにした労働者権力論、職場権力論）として語ることは許されない。問題の核心は、革命的政治闘争との諸結合を内的にも貫徹するソビエト運動としての〝七〇~七〇年代の階級形成は展望されうることであり、それは中央権力闘争ーマッセンストのラセン的発展として方針化されなければならない。

七〇年安保を論じる（まさしく一般論として）場合、つねに問題とされる〝労働者本隊の問題〟とは、かかる意味で、総評のあれやこれやの方針の見通しにあるのではない。七〇年安保~七〇年代階級闘争における〝労働者本隊〟の動向を規定するのは総評なのではなくて、反帝統一戦線であることーー反帝戦略部隊と労働者大衆の結合、中央権力闘争とマッセンストのラセン的発展こそ、階級形成＝労働者本隊の動向の規定要因であることを確認せねばならない。

4

六七年一〇・八以降の反帝実力闘争の展開は、数多くの反戦労働者を全国の生産点に生み出した。生産点における活動家が政治的統一戦線に広範結合されたことによって、第一に、組合的団結とは区別される階級的団結の内容が形成され、職場における諸々の日常的闘争が組合にではなくこの政治的統一線戦の強化に対象される構造をもつようになった。そしてこのことが、とくに官公労においては、交通運輸通信の帝国主義的再編を基底とする権力の労働組合解体ー再編攻撃に際して、それを「官公労決戦」として展望しうる主体的条件となったのである。

こんにち、官公庁における先進的反戦活動家は、組合機構に依存することなく生産点の帝国主義的再編攻撃とたち向い、そのもとに広範な大衆を結集しつつある。攻防関係の焦点は、企業体としての当局ー労働組合にあるのではなく、政治権力（官憲）と一体化した当局ー反戦派活動家と大衆にあることが、こんにちの官公労における闘いの一つの特徴である（それ故に、反戦派パージとそれへの反撃＝反レパ闘争が、普遍的な闘いとして拡がり、一つの焦点を形成している）。反戦活動家が、反レパ闘争の大衆的勝利を実現し、官公労決戦に勝利的展望を見いだすためには、それが安保決戦として実現されねばならず、現下の闘争を今秋の中央権力闘争と結合したマッセンストへと飛躍、形成されなければならない。

そして革命的左翼は、かかる労働戦線における現実に立脚して、権力闘争としてのソビエト運動の総路線を、全国労働者評議会の形成、その領導へと展開せねばならない。

労働戦線再編は、一方における権力による労働組合の解体ー政治的再編（帝国主義組合化）と、他方におけるソビエト運動ー権力闘争の開始、前進として、七〇年~七〇年代の階級決戦に至るものであり、今秋の一〇~一一月闘争を中央権力闘争ーマッセンストの勝利的展開を通じて、われわれは七〇年代階級闘争の偉大な地平を切り開かねばならないのである。

世界同時革命をきりひらくために (7)

イタリア階級情勢の現段階（下）

伊階級闘争の激化と「人民主義派」の登場

共産主義者同盟国際部

今年二月、イタリア共産党大会は一昨年より昇りでた経済の停滞現象を構造とした政治危機と社会党左右分裂、就中、労働者、南部農民と直接結合と連帯の「学生運動」の嵐の中で、「社会主義イタリアの実践化」（スターリン批判後の構造改革路線＝議会制民主主義への徹底的信頼と社会変革のプログラムを綿密に作成することを内容とする）を宣言し、チェコ侵入を非難して中ソからの独立、「国民社会主義」として「西欧社会主義の伝統の復活」を唱道し、その政治内容とした。これは当然内部分裂を引き起さざるを得ず、これを社会主義として批判的部分が中央委員会から解任され、党内部に「中道右派体制」として党官僚Eベルリンクエル「右派」にアメンドラ、両者の上にボナパルチストロンゴ書記長を戴き、左派は（ロッサナ・ロサンダ等）学生、労働者の運動に呼応する結集のため分派活動を行ないだした。

一方、この路線について、ニューレフト・グループから、アイロニカルに「運動の現実性かつ建設性に力点をおくかぎり、プログラムはできるかぎり具体的で綿密に作成される必要がある。しかしそうであればあるだけ、自由な運動の範囲がせばめられ、議会中心となり、それ以外のところで生じる大衆の自発的運動は否定されざるを得なくなる。しかも各分野がプログラムが相互に関連しあっているため、あの分野のプログラムを実現するには、他の分野のプログラムが同時に実現されねばならないという無限の循環におちいることになる。そしてもし部分的にプログラムが実施されたとしても、それが全体のプログラムからきりはなされた場合には、支配体制に統合される結果しかない。」また、議会制民主主義についても、第一次大戦以後のさまざまな「評議会運動」の経験の総括と「直接民主主義」について、ドイツ、フランス等の闘争経験を摂取しつつ、急速に展開されてきた運動を媒介に「共産党批判」の小数派意識から独自の運動論、革命論形成に向いつつある時点にイタリア階級情勢が到達しつつある。

共産党の重圧をのり越えて、学生労働者の運動の端緒が六七年秋より激発を示し、六八年秋からはルモール中道政権の成立にもかかわらずストライキが連続的に起っている。ことにイタリア労働運動のバロメーターと言われているフィアットの労働者が、「イタリア経済の奇蹟」の中での最も沈滞した部分＝重工業部門の労働者がハネはじめた。共産党は「健全な」労働組合運動の方向へ指導しようとしたが、失敗し、ニューレフト・グループの「労組をのり越えた労働者の自然発生的闘争の回復」として積極的に介入し、ピケに参加し工場でのビラまき、「労働者と学生の委員会」の形成（六八年秋より諸グループにより、労働者を組合外的に組織する課題が追求されている）によって、直接的討論を開始、組合と政党の枠を越えた闘争の組織化を意識的に追求し、同時に労働者居住地域との結合をはかる方針で闘っている。

これらの運動を成立する条件の一つに、六一年頃から労組に介入し失敗した後、手工業的に労働者をオルグしていた先駆的部分を見のがすことはできない。

これら先進的活動は①学生を学園外に出すこと②労学提携の追求③南部農民と連帯行動（四月）警察隊の銃撃により二名死亡。これより闘争が逆転して都市暴動に発展、④刑務所で暴動発生（このことの階級的意義は大きい）⑤ルモール中道左派政権崩壊、直接には社会党の分裂が原因であったが、共産党の与党化がなければ、体制維持が不可能というほどの政治危機として発展していた。すでに、体制・反体制としての分類より、秩序派か非秩序派か、と社会的政治的結着の選択が迫られていたのである。

新左翼政治党派の動向

戦後、ヨーロッパ価値意識の崩壊と、ファシズム抵抗によって返り咲いた共産党のイデオロギー一元支配は、その終えんまで十数年を要さねばならなかった。ニューレフトとしてのその組織的形態として公然と姿を現したのは一九六〇年代初め、既に政党・組合とも労働者を完全に包囲しつくしてた北部工業地帯トリノのフィアット労働者の胎動を感じながら、「カデルニ・ロッシ（赤い手帳）」が創刊された。労組への介入を積極的に行ったが、失敗、一転して手工業的に工場労働者のオルグに入る。しかし二年経て、「新資本主義」の構造とそのもとでの労働運動の性格に関する評価の違いとその間の運動によって、政党・組合の無能さが暴露され、労働者に自覚され、今こそ前衛的政治組織を結成すべきであるとする部分と「クラッセ・オペライオ（労働者階級）」とに六四年分裂する。組織指導を重視するこのグループは組織を全国化させ、そのことによって、既成政党（社会党左派、後のプロレタリヤ統一社会党）と結合を深めて行かねばならなかった最近イデオロギー闘争の強化のため、「カンティオ・ピアノ」法を発刊しているが、中間主義を免れない。

他方、前衛として自己形成しながら、労働運動に前衛の核を追求するという部分が「ポテーレ・オペライオ（労働者権力）」があり、ピサ大学には共産党と同等の組織がある。ピサ周辺の労働運動を基盤としているだけで、労働者の権力志向を併った理論かどうか、未だ未分化で不明なところがあるが、基本的には、労働者階級を中心とした、自己権力の形成と「ソヴェト形成論が運動論としてある。

以上の三組織が、工場労働者との連携を学生運動の展開の中で行なうので、総称して「労働者主義派」といわれている。

この他・組織論において、ドゥチュケ主義に近似するグループがやはりトリノにあり、前三者とともに活動しているが、「反スターリニズム」に対して、「協議会運動」のみで、工場、学園の占拠から協議会形成へと、全国的中央権力の奪取ではなく、部門別、領域別、地域別と権力をマヒさせる方針を提起している。しかし、革命的秩序維持の権力については観点がない。すなわち、彼らはアナルゴ・サンディカリスト分派である

伝統的グループでは、トロッキスト諸派があり、その最も大きいグループは加入戦術を否定して革命的共産党（六二年）分裂し、「鎌と槌派」がこの間力量をもって闘争に参加してきた。この他労働者前衛派、労働者統一派と分立しているトロッキストのスローガンは一様に「反帝国主義」と統一され、後のML同盟との大同団結を促進させている。

ML派は、中ソ対立が明確となり、共産党が中国批判した後、中国派の少数グループとして形成された。六六年秋共産党結成線の地リヴォルノで「イタリア共産党」結党する。しかし共産党として既成の組織構成をもつ必要はない、文化革命運動を起し、その中から党形成を、という部分と六七年分裂し「マルクス・レーニン主義者同盟」が分裂し、大衆闘争の中で「人民闘争」をスローガンとして農村貧民層、部市ルンペン・プロレタリアートをまき込んで、闘争をはじめる。ことにこの部分が都市暴動などで最も激烈に闘う部分である。

既成のトロッキスト組織、既成のML派から分離した部分が六八年初め「マルクス・レーニン主義者連合」を結成する。鎌と槌派、毛沢東主義者、アナキスト、革命的青年同盟を分離したグループなどが参加し、大衆闘争の中で新たなグループとして注目され、ことに、都市、農村貧民の居住区に活動の基盤を見出し、ミラノから全国的に浸透力が強化され、前述のインテリを中核とした〝イデオロギー〟集団より数倍の破壊力を秘めた統一戦線が形成されつつある。

「人民主義派」と総称されているが、各自運動論的探求に向うことのみで、革命論的政治路線の確定は、弊彼の自国帝国主義打倒へ収斂されずには おかない。五月パリ、三月ブリュッセル反NATO会議等国境を克える闘争の交流に積極的に参加しているのも、このグループである。イタリアの新たな党はまた端緒についたばかりにもかかわらず、その任務は重大。

愛媛

四国でもバリケードスト

権力の弾圧に抗し九月闘争へ

【愛媛大 分局】全国の闘う同志諸君に四国、愛媛大より闘う連帯の報告を送りたいと思う。まず戦略的に述べるならば、全国の闘う部隊を圧殺せんとする大学治安立法に対する闘いは、愛媛の地においても急激に盛り上っていった まず5月26日段階において全闘委が形成され、その組織はクラスサークルへと拡大していった。6月20日の学生大会においては、6月25日迄のスト、更に8月5日までのスト権確立がなされたが、このように部分的期間でのストでは大学立法は粉砕されるようなものではないとし、われわれ全闘委は40名の先進的学友と共に6月21日未明に、学生部を全面公開せよ！一、海上大学、の策動を自己批判せよ！一、以上を大衆団交で認めよ！の三項目スローガンを掲げて法文館のバリケードストに突入した。四国において最初のバリケードの試みは当局を震撼せしめ、民青は右翼学生と結託するといったように日共＝民青の正体が暴かれた。更に我々は、全学封鎖を貫徹すべく大学の中枢機関である本部を6月30日に封鎖を貫徹した。これにあわてておののいた学長は至急機動隊の導入を要請したが、逆に体よく権力側からその時期ではないとして断わられるといった全く学長の反動振りを我々に見せてくれた。

しかし、7月2日権力は、四国中国より合せて五百名の機動隊の導入でもって我々の戦いを圧殺せんとしたが事前に導入を知った我々は、いったん導入直前に本部を出て寮に結集した。だがしかし、7月4日に指導者5人を不当逮捕更に時後逮捕するといった強権的に打ち出た。これに対し現在＜夏休み＞という長いブランクのピンチな状況に対し闘っている。そして我々の中間総括によって問題となった一つは、我々の現在の闘いの単なる延長線上に政治闘争は存在しないということである。われわれの闘いは政府の一政策に対する反対闘争をきわめてトータルなものへと押し進めてきた。確かに運動はトータリティを要求されていたのであるが、それは全く不充分なものではなかったのではないか？

われわれはこの点を確認し、再度闘いを総体的視点のもとに把握し、9日以降の闘い、就中10月の闘いをまたそれに続くものとしてある11月佐藤訪米を闘い抜くであろう。尚この間の一切の闘いは赤ヘル部隊によってなされている。

新宿

7・26新宿西口広場奪還闘争を闘う

我々。「新宿反戦連合」は、七月二六日、午後五時頃より、三十名の赤ヘルメット部隊を先頭に、ベ平連と共に「新宿西口広場奪還闘争」を闘った。

新宿周辺は、昨年十・二一闘争、本年四・二八沖縄闘争、並びに、六・二八新宿会テイ闘争に於いて、我々の闘いの大きな軸であった。であるが由に権力は、「西口広場」の文字を「通路」と書き換え、七月十二日、十九日の二回に渡って千二百の機動隊をもって我々を一切西口から排除しようとしてきた。さらに、新宿若松町に機動隊宿舎を設置し、もって我々の十ー十一月闘争に対する治安部隊としようとしている。

我々はこれに対し、明確に「反革命駐屯基地＝新宿若松町機動隊宿舎設置粉砕」のスローガンの下、断固として闘い抜いた。

若松町の宿舎に駐屯するのは、基本的に、三多摩の七機・八機であり、これは昨年十二月、美濃部「革新都知事」が三億円事件にかこつけて増員した部隊である。このような問題に無自覚で、新宿会テイ闘争を回避したのみならず、美濃部擁護で都議選に出馬し落選した革共同中核派（北小路候補のこと）を笑ってやろうではないか。

我々は決して一般的に機動隊宿舎付近を通るデモなどを提起せず、一貫して「西口広場奪還デモ闘争」をバネに、常時機動隊が出動している状況をつくり出し、現在の国家権力の実体をまざまざと大衆的に明らかにし、さらに、それを実力闘争で粉砕し抜くだろう。

全都の青年労働者・学生諸君、八月二日（土）西口広場へ結集せよ。

最後に、機動隊宿舎設置粉砕闘争へ向けて、また十ー十一月闘争へ向けての基本的な意志一致を含んで「八・一〇新宿反戦大集会」を新宿文化会館四階＝四谷公会堂で午後六時から開く事を報告しておきます。

全都・全国の労働者・学生諸君、十ー十一月闘争を「中央権力闘争ーマッセンストライキ」を闘おう。

獄中からの通信

府中在監　中　佳一（東京大学）

手紙、12日に受け取りました。すぐ返事と思ったのですが、場所が場所ですので今日（14日）になりました。悪しからず。

貴方の手紙ですが、肝心な所が（と思われますが）ベッタリと例の如く墨で消されておりますので文意は十分把握出来ませんが、若干の現況をお伝えしたいと思います。

7月19日に第二回の〝破防法粉砕、東大分割公判粉砕、統一公判獲得〟に向けた一大決起集会ーデモが開催されるとの事、私達獄中にある者も、皆さんと呼応して、この日をメルクマールに連帯した闘いに流入する事を決意しております。

階級闘争の全体像が我々の間において、ようやく煮つまりつつあり、プロレタリア政治権力をも展望する対権力闘争が射程に入りつつある今日において、権力者のイデオロギー、暴力装置、執行体制の生の姿が除々にではあれ、その氷山の一角を顕わしつつあります

「組織された暴力」と「プロレタリア国際主義」の下、「ゲバ棒」と「ヘルメット」で突出して闘い抜かれた全学連・反戦の「ベトナム反戦」第一次羽田闘争の衝撃の波は、その後の全日本の諸階級・諸階層の全ゆる政治・経済・社会闘争を牽引し、その質的飛躍と深化と未曽有の量的拡大の下、階級闘争の質と形態を決定しました。

実力闘争を掲げ、ブルジョア独裁に対し、プロレタリア独裁＝暴力革命を公然と掲げ、この間の階級闘争を領導し抜いた革命的左翼は、七〇年安保、七〇年代階級闘争に向けて「安保粉砕・日帝打倒」の下「議会主義ー人民戦術」派との熾烈な闘いを通して有利な確固たる地歩を築きつつあります。

また、この間の、その運動の内実において、政治革命、社会革命を内包する根源的な闘いによってブルジョア独裁の虚飾としての〝平和と民主主義〟議会政治・遵法〟〝法と秩序〟はその偽りのベールをはがされつつあります。そしてこれらの事実は、権力支配機構の一部分としてある法とそれにもとずく裁判制度＝支配の手段としての司法体制の本質を、われわれの出廷拒否闘争と権力の徒としての地裁の「被告人・弁護人不在＝機動隊付」の東大分割公判＝欠席裁判強行の中に明らかにされつつあります。

〝権力者のイデオロギーの表現たる法の支配を突破し、その生の姿を引き出す芽を通し、われわれのイデオロギーと存在とを実践を通して対決させる中から、われわれの運動全体の飛躍と主体形成を推し進める事こそわれわれの任務だと強く確信しています。権力者の網の目の如くはりめぐらした支配体制＝機構に対し、全ゆる時、場合へわれわれの戦線を配置し革命的左翼へヘゲモニーの下、「組織的」「階級的」闘いを推し進める事が要請されています。

われわれは、限られた部署ではあれ、その一翼として、はるか遠くから、自らの任務に突撃する事を決意するものです。

七月十九日の大集会に結集された戦闘的労働者・市民・農民・学生の皆さんが、存在場所における自らの任務を貫徹し、闘争の広さと深さを、自らを対象化する作業を一段と押し進める中で、獲得したその統合された力を中央権力に向けた非妥協的な政治闘争として闘い抜かれる事を確信します。

東拘在監　徳差一郎（明治大学）

7・20大学治安立法粉砕・騒乱罪・破防法粉砕・東大闘争分割公判粉砕総決起集会の圧倒的勝利を目指して、獄外の同志・学友諸君と赤い革命の糸をもって連帯し共に闘うことを表明する。

昨年10・21闘争に対する騒乱罪の適用から今年1月18・19日の東大闘争に対する国家権力の大弾圧4・28闘争に対する破防法の発動と一千名にも及ぶ不当逮捕、更に中教審答申→大学治安法の法制化の企図、入管法、健保特例法延長法案の国会通過、防衛二法案等一連の政府自民党の動向は、史上三度目の世界市場再分割戦の介入をアジア後進国への侵略をもって開始せんとする日帝の侵略と反革命を一国的には統合できない現在の力量において、米帝との反革命同盟の再編強化を遂行しつつも、侵略と反革命の準備を国内におけるあらゆる分野にわたる帝国主義的再編ー特に革命的党派・人民の粉砕統合による権力関係の暴力的一挙的再編ーなし崩しファシズムに求めていることの表現である。

このような権力の動向の下に、ブルジョア民主主義ー市民主義秩序を公然と打ち破った権力に対する即自的反発をもって闘いに加わる部分やこの間のわれわれの明確な戦略戦術に裏付けられた階級闘争の質的高度化に媒介されて高度な自然発生性をもって決起してくる広汎な人民の決起をもたらしている。しかし、このような広な汎決起もいかに高度の質をもつとはいえ、自然発生性のままにおかれるならば、国家権力の暴力的・かつ徹底した大衆操作の前に再び国家権力の下に包摂されてゆくだろう

このように広汎に決起してくる部分を一大統一戦線の下に結集し党の目的意識的な指導の下、市民社会の深部にわたるプロレタリア・ヘゲモニーを確立し、安保粉砕・自国帝国主義打倒の闘いを遂行することこそわれわれの任務である。

しかし、このような歴史上最もダイナミックに展開する今、国家権力に捕われた市民社会と全く切り隔され、現実の状況に身をもって闘い合うことを許されない自分をこれほど無念に、またうらめしく思ったことはいまだになかった。一日も早く同志の諸君と共に最前線に立って闘いたい。

その日まで獄中において自らの知性と肉体をきたえ、革命的情熱にみがきをかけ、諸君の前に革命戦士として登場したい。

7月16日

東京拘置所在監　西田篤生（桃山学院大）

前略

7・19分離公判粉砕！統一公判獲得ー大決起集会に結集する全ての学友諸君へ！

一月東大闘争から既に半年。国家権力は我々の闘いの意義を圧殺するため、獄内外の抗議・ハンスト等を無視し、多くの被告を分断し、職権をもって欠席裁判を強行している。国家権力・検察庁・司法当局の三位一体となったこの事態は、東大闘争がいかにブルジョアジーを危機に追いこんでいるかを適にはっきりと表わしている。ブルジョアジーは八千五百の機動隊による血の弾圧ではまだ恐怖感をぬぐいきれず、被告を釈放しないどころか弁護士さまで監置ー懲戒処分にするという暴虐を行なっている。

しかし同志諸君ー欠席裁判の強行というこの事に、ブルジョアジーが確立したはずの司法制度を、自分の手で無視し、ブルジョア裁判とはこんなものだ！と、全人民の前に表現してくれた。追いつめられた彼らの混乱ー彼らは判決を出すにあたってあまりのグロテスクな自分の姿に茫然とするにちがいない。

分割公判を粉砕し彼らを徹底的に孤立させよ！

我々は〝被告〟というブルジョアジーから与えられたレッテルを革命家というゼッケンに転化し、ブルジョア法論理の解体へ前進する。

七月十四日　東拘にて

東京拘置所在監　荻原　貢（早稲田大学）

前略

7・19東大闘争統一公判獲得集会に向けて、東京拘置所の白いコンクリートの壁の中より社会主義学生同盟に結集する学友諸君へ、連帯のあいさつを送ります。

70年安保を真近に控え、大量起訴から破防法に到るまで、ブルジョアジーは自らの危機感を露骨に我々闘う部分に対して表わし、弾圧の嵐が訪れている。現下の情勢にあって、我々被告団は、権力と一体となった地裁の弾圧（長期拘留とりわけ大量起訴処理方式としての分割公判強行）を粉砕し、東大医6・15時計台、安田解放講堂死守闘争と、つねに先頭に立って東大闘争を領導してきた。赤ヘルメットの責任ある党派として、統一公判闘争を最後まで闘いたいと思います。

明日の第二回分割公判を出廷拒否で闘い、19日にはハンストをもって外の諸君と連帯します。

分割公判粉砕！統一公判貫徹！

社学同は闘うぞ！

七月十四日　東拘にて。

小菅刑務所在監　野村幸三（同志社大学）

前略

戦旗等の差入れアリガトウございます。

6・15時計台封鎖で顕在化し、長期にわたって全人民的な普遍的課題として問われ続けた国家権力との直接対決、即ち、個別東大闘争からの大学の帝国主義的再編粉砕として、全人民の耳目を集めた1・18~19安田ー神田までの国家権力との攻防から六カ月がすぎてしまいました。この間、10・21以降、益々その本性をあらわにした東京地域ー司法権力は、勾留理由開示裁判、勾留の裁判に対する準抗告等、現刑訴法内での合法的な我々の抗議に対してすら、何ら明確な理由を示すことなく、勾留の不当性を認めたまま、検察庁の要請を受け入れ、開きなおりつつその階級性をみずから暴露してきました。そして東大闘争の質を継承、発展させようとする我々の統一公判要求に対しても、あくまでも個別行為のよせ集めて刑法の適用可能な範囲まで審理しようとする分離案に固執し、我々被告人の出廷拒否、弁護団、傍聴人の追求の前に、機動隊付き密室裁判強行という、マスコミの言葉をかりれば「日本裁判史上最大の汚点」にまでおいつめられています。

そのような矛盾を陰蔽する為でしょう、我が熊谷裁判長はあたかも被告人との意志疎通が完全であるかのような「雁の便り」と称する出廷勧告文を乱発しています。しかし、それは、いかにとりつくろったとしても欺瞞でしかありません。なぜならば、統一公判の正当性はたなあげにしておいて、分離公判の技術的運用面に関してだけとりあげるといった、偏見に満ちたものであるからです。

熊谷裁判所は、「一人一件につき事件があって……分離公判は正当である言々」といっています。が、小生の準抗告に対する刑事二部、服部裁判長以下2名の裁判では「本件は被告人を含む多数の学生らが、組織的、計画的に敢行した集団的犯行で、しかも大規模かつ長時間にわたるものであるところ……被告人は……事実関係について一切供述を避けており……事前謀議の内容、被告人の具体的行動、役割、地位については、ほとんど明らかになっていないことが認められ、……罪証を隠滅する行為に出るおそれがないものとはいいがたく、言々で長期勾留は正当である」となっています。要するに裁判所（権力）の御都合次第でどうにも運用しうるのが刑訴法といえるでしょうか。

これに対する我々の解答は唯一つです。東大闘争が、大学の帝国主義的再編に対する反逆であったようにに司法ファショ化に対して、その真実の姿を白日の下にあばきだすこと、ブルジョア秩序の要を崩壊させること、獄中、救対、弁護団闘争から全人民闘争へと発展させることだと思います。

大学治安立法粉砕闘争が全国的規模で昂揚し、卯が同志社をはじめ全国学園バリストが圧倒的にかちとられ、各学園全共闘を大衆闘争機関として[illegible]再編されている今日、7・19分離公判粉砕、統一公判獲得、地裁弾劾大決起集会の意味は大きく、この集会を圧倒的にかちとるために、獄中でハンストをもって呼応する決意です。

分離公判を粉砕し、統一公判を断固貫徹するぞ！7・16第二回分離公判を粉砕するぞ！司法ファショ化を粉砕するぞ！7・19大決起集会にハンストで呼応するぞ！騒乱罪、破防法を粉砕するぞ！安保粉砕！日米両帝同時打倒！

七月十四日　小管にて

共産主義者同盟労対部パンフレット
反帝統一戦線と階級的労働運動
第一章　労働運動の転換とは何か
第二章　70年安保闘争における組織された暴力の位置
第三章　反レ・パ闘争の階級的意義について
第四章　右派労働運動の性格と動向
発売中　一五〇円（〒五〇円）